

高等部における進路指導の課題と卒業後の支援

～平成22年度普通科卒業生に対する進路指導を通して～

鈴木 牧子 高田 史子

研究の概要

この10年余りで、本校高等部生徒の大学進学先は少しずつ変化し、幅広い学部学科で学ぶ者が増えてきた。また、大学院に進学したり、留学したりする者も出てきている。聴覚障害を有する学生自身の努力や支援担当の方々の尽力等によって、「障害学生が、様々な支援制度を活用しながら大学等の高等教育機関で学ぶ」ということが広がってきた事実に関心より感謝したい。そしてそれと同時に、大学等に生徒を送り出す側には、学力と共に「人間関係を大切に（自分も周りの人も尊重する）姿勢」、「コミュニケーション能力（日本語や手話による理解力・表現力）」、「聴覚障害によって生じる社会的バリアを周囲に説明する力」、「情報保障（情報支援）の必要性や手段を説明し、それを的確に要望していく力」等も育成する責任があるということを実感するようになった。

私たちは、これらの力や姿勢を生徒に身につけさせるために、平成20年度より指導の場面・内容・方法を検討し、担当学年に対する実践を積み重ねてきた。一般高校との交流（手話コーラス・聴覚障害に関する説明）、文化祭などの行事（聴覚障害に関わる展示や映画制作）、自立活動（聴覚障害を説明する練習）、大学教員による出前授業（ライフスキルを高めるための心理学の授業）、幼稚部・小学部教諭による講義（日本語習得の重要性）等、進路指導として行った取り組みは、生徒の意識変革、成長につながったという実感を持っている。

また、私たちは卒後支援として、進学先の大学で「難聴疑似体験」を実施しているが、この活動は、参加して下さった大学の教職員や学生の「聴覚障害に対する理解」を深めることにつながった。したがって、このような卒後支援は、聴覚障害学生が一般の学生と共に学ぶための支援システム作りに少なからず寄与できると考えている。

聴覚障害生徒（学生）の「生きる力」を高めるために、聾学校高等部の進路指導及び卒後支援のあり方は、今後も様々な検討や実践を積み重ねる必要がある。